

---

## カミーユ・ピサロ作《りんご採り》に関する考察 ——19世紀フランスのユートピアニズムを軸に——

深尾茅奈美(京都大学)

---

本発表では、カミーユ・ピサロが新印象主義に傾倒した時期に制作した《りんご採り》(1881-86年、大原美術館所蔵)を中心に据え、その図像の生成経緯を明らかにすると共に、作品の根底に見出される、社会思想と密に結びついたピサロの芸術理念を考察する。正方形の大型カンヴァスを用いた本作品には、りんごの収穫に励む農婦達が点描法で表されている。石谷治寛氏の論考を例外として、先行研究では本作品の思想的側面について考察されることがほとんどなかった。しかしながら、果実を摘むという動作が多様な象徴的意味をもつことを考慮しても、本作品は歴史的な図像伝統を踏襲し、何らかの意味内容を包含するものとして捉えられるべきであろう。

画中に描かれているのは、りんごを木から落とし、拾い、食べるという一連の動作に携わる三人の農婦である。ピサロがアナキストであったことは周知の通りであるが、石谷氏は農婦達の動作に、労働と休息という活動の循環と、共同的な労働の在り方を見出し、本作品がアナキストにとっての理想的な農村像を表していると主張した。発表者もまた、本作品がアナキズム思想に基づくものであったと考えるが、加えて、ピサロがここでユートピア調の農村像を作り出すに際し、「黄金時代」を想起させる果実摘みの図像を意識的に採用した可能性を新たに提示したい。

オヴィディウスの『変身物語』等において、「黄金時代」は最も平和で原始的な時代として語られ、これを絵画化する場合には、自然と人間の共生を象徴する果実摘みの図像を描き込むことが一般的であった。ジョン・ハットンも論じたように、19世紀末のフランスでは、この神話主題がアナキズム思想と連動し、政治色を帯びたイメージへと読み変えられていく。果実摘みを含むシニャックの《調和の時代—黄金時代は過去にではなく、未来にある》が、アナキズムに基づくユートピアを描いていることは、既に多くの研究者によって認められている。

アナキストの間でユートピア思想が顕在化するのが1890年代前半であったことを考えると、1880年代の《りんご採り》はこの系譜の先駆的作例として位置付けられよう。本発表では、《りんご採り》のイメージが「黄金時代」の図像伝統を踏襲しつつ、ピュヴィ・ド・シャヴァンヌによる理想郷のイメージを応用して作り出されたことを指摘する。また、ピサロがここで現実の再現を否定するような正方形の支持体と、抽象化を促す点描法を用いることにより、形式的側面から絵画の象徴性を高める工夫を行っている点にも注目したい。加えて、社会思想を示唆するこの種の作品が制作された背景に、当時芸術界で議論されつつあった「社会芸術」に対する画家の関心があったことを新たに指摘し、本作品が、理想的な社会の在り方を視覚化するという「社会芸術」の実践を、早期に試みた作例であったと結論付ける。